

オンデマンド市民公開講座 — 新型コロナ禍における子どもの健康 — 財団HPにて公開中!


コロナ×こども本部 メンバー

 コロナ ×
こども本部

特別寄稿
「更なる小児医学研究の興隆に向けて」

 公益社団法人
日本小児科学会会長
岡 明

わが国の未来を考えると、子どもたちの健全な育成が極めて重要な課題となっており、それを支える小児医学の研究活動も益々重要性を増しています。一方でわが国の医学研究については、研究を支える支援が、従来の公的研究費等から産学連携による民間からの研究資金なども含めた多角的な経済的支援へと移行してきています。成人領域では市場規模が大きいことから、産学連携活動が盛んになっており、研究活動を支える原動力にもなっております。しかし、小児新生児の分野や社会医学的なテーマについては、民間との共同研究につなげるには課題が多いのが実際であり、そうした社会との連携をもっと探る必要があります。

また、海外では個人の寄付が小児医学の研究に役立てられており、例えばアメリカの小児病院では多額の寄付によって維持されている実情があります。患者数の少ない小児の難病などでも、サポートする団体が研究資金の寄付を集める窓口になり、その疾患の最先端の研究を支える活動をしています。

日本小児医学研究振興財団は、わが国での小児医学研究のそうした課題に対して、研究を財政的な面で支援するために設立され、特に若手小児科医育成などの支援などに多大な貢献をされて参りました。すでに、これまでの支援の成果が今日のわが国の小児医学研究の成果と人材育成の一部を支えるに至っていると思います。また、小児科学会も今年度より財政的な支援を始めることといたしました。

すべては子どもたちと日本の未来のためであると思います。ぜひ、引き続き幅広い皆様からの篤志を、日本小児医学研究振興財団にお寄せいただく様に、日本小児科学会としてもお願いをさせていただきます。

「新型コロナ禍における子どもの健康」



新型コロナ禍における子どもの健康

(公財)小児医学研究振興財団常務理事 座長 奥山 眞紀子 (日本子ども虐待防止学会理事長)

今年は新型コロナウィルス感染症というとても大きな問題に世界が揺れています。その中で、初期の何もわからなかったころに比べて、半年以上たってかなりのことがわかってきました。それにつれて、「未知」への不安が減少し、初期に多かったデマなどは少なくなり、少しずつ社会が落ち着いてきています。事実を知ることが重要なのは子どもも同じです。子どもにわかるように伝えてあげたいものです。

そして、不安になると、本来できていたこともできなくなり、それによる不利益も生じてきます。子どもにとっての不利益として、予防接種を控えるということが大きいことはこれまでの海外での感染症拡大時にも見られており、今回日本でも起きていることです。そのような不利益から子どもを守ることも大切です。

多くの子どもや家族のご協力で、子どもや家族のこころの問題に関しても明らかになってきました。かなり多くのお子さんやご家族が不安を強くしています。当然のことです。不安を持つのは当たり前ですが、それが不利益に繋がらないような努力が必要です。災害などの困難があると、本来は寄り添って「絆」を求めるのが人間です。しかし、感染症はその絆がマイナスに働くので、繋がる方法が少なくされてしまいます。「新しい生活様式」はまさに絆を作りにくくする生活でもあります。そんな生活の変化を強いられ、親も子もいら立っていることは少なくありません。夫婦喧嘩、親子喧嘩で警察に連絡することも増加しているようです。不安や苛立ちへの対処法が重要です。

今回は、感染症そのものを知ること、子どもにとって不利益となる予防接種控えの問題に関して、現在の家族の心の状況、心が安定した生活へのアドバイスを各専門家の先生にお話しいただくことができました。皆様のお役に立てれば幸いと存じます。



新型コロナウイルス感染症 ～こどもの疫学的知見を中心に～

国立感染症研究所感染症疫学センター主任研究官 神谷 元

新型コロナウイルス(以下、SARS-CoV-2)は、2019年12月以降中華人民共和国湖北省武漢市で発生した原因不明の肺炎患者から検出された新種のコロナウイルスです。2月11日、世界保健機関(WHO)は新型コロナウイルス感染症の正式名称を「COVID-19(coronavirus disease 2019)」と決めました(以下、COVID-19)。COVID-19は日本では2020年2月1日に指定感染症に定められました。これにより、保健所において、COVID-19患者に対して積極的疫学調査(感染源のさかのぼり調査や接触者調査)の実施による感染者の詳細な情報収集が行われてきました。その結果、症状は発熱、せきなどの呼吸器症状が多く、肺炎を合併すると重症化すること、

基礎疾患を持っている人や高齢者は重症化しやすいこと、周りの人へ感染させるリスクの高い行動、そしてそれを防ぐためにはどうしたらいいか、ということがだんだんとわかってきました。今回はこどものCOVID-19について、疫学的な視点から分かってきたこと、わかっていないことをお話しします。



新型コロナウイルス流行期における予防接種

聖マリアンナ医科大学 小児科学教室 講師 勝田 友博

2019年末から始まった新型コロナウイルス感染症の流行により、不要不急の外出は控えることが推奨されました。そのような状況では予防接種のために病院を受診するのも控えるべきでしょうか?日本小児科学会の調査によると、国内における子どもの新型コロナウイルス感染症の多くは家族から感染しており、病院での子どもの感染は報告されていません。それに関わらず、川崎市で調査されたコロナ流行期における実際の子どもの予防接種率は、1歳未満においては概ね例年通り維持されているものの、接種推奨年齢が上がるにつれて徐々に減少し、11~12歳で接種する2種混合ワクチン(沈降ジフテリア破傷風混合トキソイド)に関しては67%も減少していました。

新型コロナウイルス感染症を恐れて適正な時期に予防接種がなされないと、本来であればワクチンで予防することができる新型コロナウイルス感染症よりも怖い感染症へかかるリスクが高まってしまいます。接種を迷った場合や、既に接種機会が遅れてしまっている場合であっても、かかりつけの先生と早速相談してなるべく早く接種をしましょう。

留学体験記

UCL公衆衛生学部
(ロンドン)の
留学報告国立国際医療研究センター
グローバルヘルス政策研究センター
順天堂大学医学部小児科

細澤 麻里子

私は、「発達障害を有する児における併存精神疾患発症のリスク因子の解明」というテーマで本財団にご助成して頂き、2018年から2年間、英国ロンドンにあるUniversity College London(UCL)のDepartment of Epidemiology and Public health, International centre for lifecourse studies in society and healthに客員研究員として留学しました。

英国は古くから疫学研究が盛んで、出生年の異なる大規模コホートがいくつもあります。私の留学先では、これらのコホートデータを用いて様々な健康課題についてライフコースの視点からの研究が行われていました。ここで私は、2000年頃に出生した約2万人の子どもの追跡調査をしているミレニアムコホートを用いて自閉スペクトラム症を有する児(以下自閉症児)における二次障害予防やウェルビーイング促進に関する研究を行い、自閉症児にお

●主催：(公財)小児医学研究振興財団 ●共催：(公社)日本小児科学会

- 後援：厚生労働省、(公社)日本医師会、(公社)日本小児科医会、(公社)日本小児保健協会、(公社)日本新生児成育医学会、(公社)こども環境学会、(一社)日本小児感染症学会、(一社)日本子ども虐待防止学会、(一社)日本小児神経学会、(一社)日本小児心身医学会、(一社)日本小児精神神経学会、(一社)日本保育保健協議会、(公財)母子衛生研究会、(公財)日本学校保健会、(一社)日本学校保健学会、(社福)日本保育協会
- 協賛：日本マクドナルド(株)、(株)オグラ



コロナ禍で子どもたちが受けている心身の影響 ～コロナ×こどもアンケートの報告～

国立成育医療研究センター 社会医学研究部／コロナ×こども本部 半谷まゆみ

新型コロナ流行下において、子どもたちは、感染症自体による医学的な問題よりも心理社会的問題に多く直面してきました。おとなと比べて声をあげることが難しい子どもたちは、どのような状況に置かれていた／いるのでしょうか。おとなは、子どもたちのために何ができるのでしょうか。

国立成育医療研究センターのコロナ×こども本部は、2020年春から夏にかけて、全国のこどもと保護者を対象に2回の大規模インターネット調査【コロナ×こどもアンケート】を実施し、のべ1万5千人の方々にご協力いただきました。秋以降も継続的に調査を実施していく予定です。

これまでの調査結果で、緊急事態宣言中はもちろん、学校再開後においても、学校や家庭で子どもたちが多くのストレスを抱えていた／いることが明らかになりました。また、逃避行動や集中力低下、睡眠障害、自傷他害行為など、ストレス反応が予想していた以上に多く見られています。子どもたちから預かったおとなへの伝言(自由記載)は、どれも心に響くものでした。本講座で紹介できるのはほんの一部ですが、ぜひ当センターHPで報告書をご覧ください。

調査の結果を踏まえて、こどもの周りにいるおとなの皆さんに、お願いがあります。ぜひ、家庭で、学校で、子どもたちと関わるそれぞれの場で、こどもの気持ちを聴いてあげてください。おとなはつい、こどものイライラや暴力といった行動的側面に目が向いて叱ったりしてしまいがちです。しかし、その行動の裏にある、言葉にできていない不安や不満などを話せるように助けてあげることが、こどものストレスケアになります。過去の大规模災害後の調査で、こどもの心の傷・症状は時間が経ってから顕在化してくることが知られています。一種の災害とも言えるこのコロナ禍、中長期的な影響にも注意が必要です。子どもたちとの向き合い方を見直すきっかけにいただけたら幸いです。



日々の過ごし方のコツ ～安心感を得るには～

横須賀市療育相談センター 所長 広瀬 宏之

いつもと違う世界で暮らしていても、毎日の生活は途切れることなく続いていきます。これまでと同じような生活リズムと、日常活動を維持していくことが大切です。

休むときは休む、美味しい食事を味わう、体を動かす、家族や友達とおしゃべりをするなど、当たり前のことを当たり前にやっていくことが何より大切です。

そうは言っても落ち着かない毎日です。心がざわざわとして足元が揺らぐような感覚が続きます。どうやったら安心感が増やせるのでしょうか？反対に、何が安心感を減らしているのでしょうか？

他人との関わりで安心感を得られることがあります。自分の好きな活動に没頭することで安心感を得られることもあります。小さい頃に楽しんだことが自分にとって一番馴染みのある、心温まるひと時となることもあります。演者は、鉄道と音楽と美味しい食べ物にそれぞれに相当します。

一方で、子どもは大人次第です。身近な大人たちが安心してることが大切です。好きなことで気分転換をするのもよし、ぐるぐる悩むのもよし、面倒くさいことは後回しにするのもよし、誰かにSOSを出すのもよしです。ちなみに、相談相手は必ずしも専門家である必要はありません。気心の知れた馴染みのある知り合いとおしゃべりが心を癒すことは、誰でもが経験していることだと思います。

本講演ではリラクゼーションとマインドフルネスの簡単な紹介も行います。

感染者への配慮も強調したいと思います。今日感染していなくても、明日感染する可能性があるのです。誰でも感染する可能性があります。誹謗中傷は厳に慎んで欲しいと思います。

公開講座の先生方の詳しいご略歴・所属学会等は
財団HPの市民公開講座に掲載されています。

<http://www.jfpedres.or.jp/2020.html>



いては診断時期が遅れるほど思春期における抑うつ・自傷のリスクが高まることや、診断時期の決定要因を明らかにしました^{1,2}。当初小さく始めた研究でしたが、指導教授のサポートの中、興味を持ってくれる人が増え、その後様々な学部・大学の研究者と共同研究する機会に恵まれました。最後はCOVID-19の影響で大学が閉鎖され慌ただしく帰国となりましたが、留学先で様々なバックグラウンドの人と出会ったこと、異なる価値観の中で自分の研究や日本について考える機会を得たこと、そして国を越えて同じことに関心のある研究者と一緒に研究する機会を持てたことは大変貴重な経験となりました。今後も英国で学んだことを活かして、発達障害を有する子ども達も含めた子どものメンタルヘルスに関する疫学・政策研究を日本の子ども達を対象に、諸外国との比較を交えて行っていく予定です。最後となりますが、留学を後

押しして下さった日本の先生方、懲りずに指導して下さった留学先の先生方、一緒に行ってくれた家族、そしてこの貴重な留学の機会を支えて下さった本財団の皆様がこの場をお借りして改めて深謝申し上げます。

研究成果(掲載済)：

1. Hosozawa, M., Sacker, A., & Cable, N. (2020). Timing of diagnosis, depression and self-harm in adolescents with autism spectrum disorder. *Autism*. <https://doi.org/10.1177/1362361320945540>
2. Hosozawa, M., Sacker, A., Mandy, W., Midouhas, E., Flouri, E., & Cable, N. (2020). Determinants of an autism spectrum disorder diagnosis in childhood and adolescence: Evidence from the UK Millennium Cohort Study. *Autism*, 24, 1557-1565. <https://doi.org/10.1177/1362361320913671>

研究助成金

- ① 小児医学領域全般に関する研究費助成
(Research Grants for Pediatrics)
総額700万円 1件200万円以内
- ② アサヒグループ食品研究助成金(乳幼児栄養に関する研究費助成)
(Asahi Group Foods (Wakodo) Grants for child nutrition)
総額100万円 2件程度
- ③ 小児の社会医学的研究(疫学・統計含む)
(Research Grants for Social Pediatrics)
総額300万円 1件100万円以内
- ④ 学校健診・診療情報データベース利用による研究助成金
(A Grant for School Health Record/ Electronic Medical Record Database Study)
1件30万円以内 3件以内【新設】

※(一社)法人健康・医療・教育情報評価推進機構が保有する学校健診情報
データおよび電子カルテ診療情報のデータベースを用いた臨床研究。

海外留学
奨学金

- ① 小児医学領域全般に関する研究
総額350万円
- ② 子どもの心の問題に関する研究
1件150万円

優秀論文
アワード

日本小児科学会、
日本小児神経学会、
日本小児精神神経学会 及び
日本小児心身医学会
機関誌に掲載された原著論文のうち、
優秀論文の筆頭著者を褒賞。

※応募要項は財団ホームページにてご覧いただけます。

賛助会員(個人)

※敬称略 五十音順

赤司 俊二 旭 壮一郎 安次 肇 東 寛 足立 雄一 熱田 裕 雨宮 伸 鮎沢 衛 新垣 義夫 荒川 浩一 有賀 正誠 飯島 幹夫 飯塚 隆 五十嵐 ケミ 石井 尚吾 石井 正浩 石倉 健司 石崎 朝世 位田 忍 井田 博幸 井田 孔明 井田 路子 市橋 光 市津見 梓 逸見 睦心 伊藤 悦朗 伊藤 秀一 伊藤 末志 伊藤 進 伊藤 辰夫 伊藤 保彦 伊藤 雄平 稲垣 治 稲垣 由子 井原 健二 井原 幸子 今井 秀人 今村 孝 岩田 敏 岩田 力 岩田 二郎 内田 正志 内田 祐	宇理 厚雄 江口 尚彦 衛藤 隆 衛藤 義勝 遠藤 慎夫 小穴 慎二 老田 礼子 尾内 一信 大賀 正一 大澤 真木 大嶋 勇成 大久保 美登里 大藁 恵一 太田 和秀 太田 秀臣 大塚 晨 大西 正純 大野 耕策 大森 伊織 岡 明 岡田 純一 岡田 満 緒方 勤 岡部 一郎 岡本 博文 小川 俊一 沖 潤 小口 学 奥山 真紀 小栗 仁 小坂 慈 小田 美知子 小野 靖彦 賀川 治美 加治 正行 勝部 康弘 後藤 達夫 加藤 均 加藤 誠 加藤 正彦 加藤 有一 加藤 陽子 門脇 弘子	金子 一 加納 芳郎 鴨下 和子 河西 敬世 河川 紀昭 川又 はるみ 神崎 晋 喜多 悦子 貴田 幸子 北中 育子 吉川 哲司 木野 稔 日下 宏 楠田 隆 楠原 浩一 工藤 協志 久保 政勝 窪田 満 倉辻 忠俊 桑原 尚志 呉 繁夫 郡 健一 小池 晶一 小泉 ひろみ 河野 幸治 河野 陽一 香美 祥二 神山 潤 桑原 尚志 幸山 洋子 興梠 ひで 小坂 仁 兄玉 浩子 後藤 彰子 後藤 敦一 後藤 繁一 小林 正夫 小林 典久 小山 佳紀 犀川 太	齋藤 和 齋藤 伸 齋藤 博久 齋藤 進一 佐伯 雄夫 嵯峨 規夫 酒井 康成 坂本 由美 佐久間 弘子 櫻井 嘉彦 佐々木 望 椎谷 由里 四方 あかね 重松 陽介 嶋田 圭 清水 俊明 下条 直樹 白井 国寿 白石 裕比 白川 嘉 末延 聡 杉浦 壽康 杉本 久和 杉本 圭相 鈴木 孝 鈴木 敏雄 鈴木 康之 鈴木 英太郎 鈴木 亮 須田 憲治 須磨 亮 清野 佳紀 関 秀俊 関口 進一郎 瀬島 斉 高橋 俊夫 高橋 協 高橋 尚人 高橋 孝雄 高橋 勉 滝田 琢 滝田 順子	和由 治 仲治 久 博久 進一 進一 雄夫 規夫 康成 由美 弘子 嘉彦 望 佐由 里 あかね 陽介 圭 司 俊明 直樹 国寿 裕比 嘉 聡 康 久和 圭相 孝 敏雄 康之 英太郎 亮 憲治 亮 佳紀 秀俊 進一郎 斉 俊夫 協 尚人 孝雄 勉 琢 順子	宅見 徹 竹内 則夫 竹重 博子 竹島 泰弘 武知 哲久 竹茂 剛 田中 篤 田中 なみ 田中 英浩 玉井 浩 田村 喜久子 田村 正徳 田村 勝一 千田 和彦 長 秀男 塚田 明子 辻 章志 續 晶子 堤 幸 鶴澤 正仁 手塚 勝 寺門 道之 寺田 春郎 寺本 貴英 デュプラ 尚子 遠山 拓郎 戸部 創 外木 秀文 富沢 修 永井 崇雄 永尾 尚子 永島 哲郎 中坪 希美 中西 浩一 中野 貴司 中村 公俊 中畑 龍子 中原 智雅 成田 雅美 新津 直樹 西久 保敏 西澤 四郎 新田 康郎	西巻 滋 根来 民子 橋口 玲子 橋本 和廣 長谷川 泰延 長谷川 行洋 長谷川 俊史 長谷川 茉莉 長谷川 美香 羽田野 爲夫 服部 益治 服部 元史 馬場 常嘉 早川 依里 原 寿郎 張田 豊 波呂 久美子 日暮 眞 平尾 敬男 平山 雅浩 廣瀬 伸一 廣津 卓夫 福重 淳一郎 深澤 隆治 福永 慶隆 藤井 達哉 藤枝 幹也 藤岡 雅司 藤田 伴男 藤野 弘子 藤村 匠 藤脇 建久 二村 真秀 船戸 正久 船曳 哲典 舟本 仁一 平家 俊男 別所 文雄 保坂 シゲリ 星加 美恵子 保科 弘毅 細井 創 細矢 光亮 堀川 玲子	堀米 仁志 前川 喜平 前多 治雄 前田 美穂 正木 拓朗 松尾 宣武 松尾 雅文 松尾 宗明 松平 隆光 松永 伸二 真部 淳 丸山 剛志 丸山 博 丸山 輝一 三池 修紀 水谷 克己 水野 志保 南 享 南沢 正和 宮尾 見代 宮城 雅也 宮島 祐 宮代 英吉 麦島 秀雄 村上 巧啓 村瀬 雄二 村田 要一 村田 知華 本村 福祥 元山 哲夫 森 浩幸 森内 友宏 森尾 直彦 森口 秀子 森下 利貞 守田 友明 森田 浩一 盛武 浩一 森脇 信一 八木 大地 安田 寛二 安田 幸重 柳川 弘 藪内 秀雄 山内 稜滋	山川 毅 山形 崇倫 山岸 敬幸 山口 清次 山下 薫 山下 美代子 山下 裕史朗 山下 亮子 山城 一郎 山田 恭聖 山野 恒一 山本 圭子 山本 威久 山本 玉路 山脇 英範 横田 俊一郎	横田 俊平 横谷 進 横山 茂 横山 義正 吉川 哲史 吉田 康子 吉田 ゆかり 芳野 信 吉原 重美 脇 研自 脇口 宏 和田 和子 渡邊 信雄 渡辺 博 渡部 礼二
---	---	---	---	--	--	--	--	---	--

賛助会員(法人)

アサヒグループ食品株式会社
エーザイ株式会社
MSD株式会社
杏林製薬株式会社
Story of the tortoise株式会社
第一三共株式会社
帝人ファーマ株式会社
株式会社ナチュラルサイエンス
Meiji Seika ファルマ株式会社
医療社団法人 メディカル・プロ

協賛企業

アサヒグループ食品株式会社
アステラス製薬株式会社
株式会社オグラ
JCRファーマ株式会社
武田薬品工業株式会社
中外製薬株式会社
大日本住友製薬株式会社
日本マクドナルド株式会社
ノボルディスクファーマ株式会社
マルホ株式会社

寄付者

吉川 武志

賛助会費は、所得税控除または
税額控除を受けられます。

個人 1口/年 10,000円 法人 1口/年100,000円

ご入会・会員のご所属先変更などのご連絡は、下記で承っております。

事務局



公益財団法人 小児医学研究振興財団
JAPAN FOUNDATION FOR PEDIATRIC RESEARCH

〒110-0015 東京都台東区東上野3-32-2 廣瀬ビル4B

TEL (03) 5818-2601 / FAX (03) 5818-2602

e-mail: shouni-iken@jfpedres.or.jp

<http://www.jfpedres.or.jp/>

編集後記

「子どもの世紀」について

News Letter題字の「子どもたちの世紀」は、日本小児科学会が創立
百周年を迎えた当時の厚生大臣であられた小泉純一郎先生に揮毫を
お願いしてご快諾頂き、総理大臣ご在任中にお書きいただいたものです。

新型コロナウイルス感染症が子どもにも大きな影響を及ぼして
います。子どもの生活に制限が加えられている中で、子どもの健
康を考える市民公開講座をwebで開催させて頂きました。多くの
の方に御視聴頂き、子どものこころと体の健康を守り、向上させる
方策を知って戴きたく存じます。皆様の貴重な御意見や御感想を
小児医学研究振興財団にまでお寄せ下さい。

(常務理事 五十嵐 隆)